

2017.11 まちの語り ぶち★ きらり



石松団長(前列中央)と「下関劇団かもめ」の皆さん

下関劇団 かもめ

綾羅木にある中山神社を響灘に向かうと、海岸の手前、ちょうど下関北バイパスの下辺りに芝居小屋があります。今回は、この芝居小屋を拠点に活動を続け、今年で40周年を迎えた「下関劇団かもめ」を紹介します。

12月の40周年記念公演に向け、稽古に励む「下関劇団かもめ」を訪ね、団長の石松義國さんに話を伺いました。

人情劇を下関で

下関劇団かもめは、多くの人に分かりやすい時代劇や人情劇を演じたいという思いで、今から40年前の1977年(昭和52年)に旗揚げしました。当初は石松さんの知り合いの劇団員に出演を頼んで、下関詩吟の会や日本舞踊の方たちと一緒に「お楽しみ演芸会」をやっていました。このことが新聞に取り上げられ、劇団員募集の記事をきっかけに十数人の若者が集まり、劇団としての本格的な活動が始まりました。

自前で芝居小屋を

本格的に活動を始めたものの、練習や稽古する場所がなく公民館などを借りていました。当時から団員はいろいろな職業の方が集まっていたので時間的な制約があり、もっと自由に稽古ができればと、旗揚げから約10年後に、団員や家族などの協力で、自前の芝居小屋「かもめ専用劇場」を建てました。

▼12月の記念公演に向け稽古に励む団員の皆さん



芝居小屋は、80人程度が収容できる広さがあります。

劇団の「かもめ」という名前は、旗揚げの頃に、石松さんが下関で活動していく名前として「下関の海峡の上を舞う『カモメ』ってどうか」と女性団員たちに相談し、ひらがなで「かもめ」にしたそうです。

かもめは笑いと涙で 感動と楽しみを

同劇団は、40年間、明治、昭和を舞台にした人情劇を演じています。「とにかく『笑いと涙』です。公演では、笑って、泣いていただくをモットーに、笑いと涙を提供し、来ていただいた方に感動してもらい、楽しんでいただけることを考えています」と石松さん。

現在の団員は、市内各地の20歳、70歳代の男女16人。団員の中には、

芝居小屋を建てた頃から現在も活躍している仲間もいます。職業も保育士や介護士など幅広いため、週3日、夜に集まって稽古に励んでいます。仕事を終わってからの稽古にもかかわらず、皆さんの姿は生き生きと楽しそうでした。

公演は「かもめの芝居小屋」を中心に、福祉施設などでボランティアでやったり、県内のホテルに呼ばれたりすることもあるそうです。ぜひ一度、笑いと涙の人情劇に触れてみませんか。



▲記念公演「落葉の唄」の1場面

下関劇団かもめ40周年記念公演

上演作は姉と妹の絆を描いた「ふるさと」全3幕です。

■公演日 12月3日(日) 午後2時から

■場所 かもめ専用劇場
(綾羅木本町7丁目12-21)

■入場料 800円

■問い合わせ

「下関劇団かもめ」団長 石松まで
(☎252-5545)